

伊東俊太郎著 『比較文明〈新装版〉』

東京大学出版会、二〇一三年

冬 月 律

一 はじめに

本書は、「世界の平和と人類の共存」を目指す学問としての「比較文明（論）」を軸にして、地球上に存する多くの文明の独自の価値や意義に相互理解の橋架けとその発展に向けて、諸文明の比較という新しい観点から地球の文明史の構想が描かれている名著である。さらに、本書は、次々と新たな知見が求められる現代の学問であるからこそ古典が必要であることを目的として刊行された、古典としての評価の高い著作である「UPPコレクション」の一冊である。

二 本書の構成と概要

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

I 比較文明論の枠組み

1 文化と文明

2 地球的文明史に向かって

3 新しい人類史の時代区分——五つの「革命」について

II 比較科学史の射程

4 比較科学史の基礎視角

5 比較数学史への途

- 6 自然の概念―東洋と西洋
 - Ⅲ 地中海世界
 - 7 地中海文明の構造
 - 8 十二世紀ルネサンス―西欧文明へのアラビアの影響
 - 9 地中海世界の風景
 - Ⅳ 比較文明論の対談
 - 10 比較文明論の建設
 - 11 比較思想の地平
 - 12 地球時代の文明史像
 - 結び 「世界学」のすすめ
 - あとがき
 - 新装版あとがき
- 右記の通り、本書は四部構成（比較文明論の枠組み・比較科学史の射程・地中海世界・比較文明論の対談）をとっており、八本の論文とエッセイ、対談を通して比較文明が論じられている。
- なお、評者の力量ではすべて書評することはできないため、評者がとくに関心をもった論文に限ってより具体的なコメントを行った。

第1部 比較文明論の枠組み

第1章「文化と文明」では、文化と文明、cultureとcivilizationの言葉の由来とその違いについて論じられている。筆者は、まず日本における「文明」については福沢諭吉と西周における「文明」を取り上げている。つまり、福沢における「文明」とは、近代西欧がもたらした科学革命や産業革命を経た科学技術を発展させ、自由主義経済を発達させ、同時に反封建の自由主義・個人主義を実現した啓蒙主義を基本とする近代ヨーロッパ社会の状態をさすものであり、西はCivilizationを文明と開化、その両語を併せた「文明開化」が明治日本の近代化のスローガンであったことを示している（四五頁）。一方で「文化」については内藤湖南や三宅雪嶺などの観点を整理すると、「文化」という言葉の使用は、どうやら三宅あたりから始まっていて、「文明」とは異なり物質文明に対する精神的学術文化という感じをもっているように思われる（六頁）。それ以後、こうした「文明」に対する「文化」の概念は、物質「文明」に対する精神「文化」といったニュアンスの対立が登場すると述べている（八頁）。次にcultureとcivilizationについて、cultureをエドワード・タイラーとグスタフ・クレム、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーらにおける概念を取り上げて整理した結果、クレムとヘルダー両者の学説は、タイラーに

よって明確に再定義され、一般化し、今日における「文化」の概念が普及するにいたったのであると述べている(九一―一頁)。

一方で、civilizationには、文化と文明は本質的に連続したものであり、文明は文化の特別発達した高度の拡大された形態であるとするものである。「精神文化」と「物質文明」のように、これらは連続的なものではなく、対立するものとして捉えるものの二つの見方があるとし、このようなドイツの文化哲学や文化社会学の用法で日本語の「文化」や「文明」のニュアンスに影響を与えたことへの可能性について述べている(九一―四頁)。第1論文の最後には、こうした「文化」と「文明」の問題点を挙げている。つまり、文化は精神革命の時代に花開き、物質的には確かに大変貧しい時代であったが、精神的には非常に高揚した時代であった。その一方で物質文明をつくりだした科学革命は人間を豊かにしたが、同時に公害や核兵器や資源枯渇の問題などが出てきて、科学技術の根本的反省が迫られており、今こそ、科学技術のあり方と人間の本来の生きがいとの関係の再考が必要であるとする主張がなされている(二五―一九頁)。

第2章「地球的文明史に向かつて」では、まず西欧が「世界」であった時代、つまり西欧中心の世界・西欧中心主義とかく結びついていた「近代」の終焉の後に来るものが「非西欧の復権」

であることが述べられている。また、筆者があえて「復権」という言葉を使用したことには、非西欧文明の伝統が西欧中心的歴史像によって世界史の領分から不当に疎外されてきた―西欧は永遠の昔から文化の中心であったわけではなかったのが事実である―ことに起因する(二二頁)。さらに筆者は、今日においてほとんど通念化されている西欧中心主義的な世界史像(世界史の単線的系譜)―オリエント文明↓ギリシア文明↓ローマ地中海文明↓西欧文明↓西欧文明の拡大―も実は西欧の歴史学者によって作り上げられた一画面的史像であると指摘し、こうした西欧中心的な世界史像の成立について、ヘーゲルの歴史哲学(ギリシア↓ローマ↓キリスト教的近代/ゲルマン諸国家の成立)・ランケの経験的歴史主義(オリエント↓ギリシア↓ローマ↓ローマ的・ゲルマン的諸民族の成立)・マルクスの唯物史観(オリエント↓ギリシア↓中世キリスト教世界↓近代/西欧世界)の三つの西欧的パターンに分けて説明した(二二―二六頁)。現実的には、十五世紀後半以降の「大航海時代」という地盤の獲得と十七世紀の「科学革命」の遂行が、世界史における西欧の優位の真の起源であるし、さらに十八、十九世紀の「産業革命」することによって確実に西欧が「世界」に成り得た(三一―三三頁)が、このような西ヨーロッパ中心の従来の歴史観がいかに一画面的であるかを、筆者の専

門である科学史的事実に基づく検証がなされている。まず、オリエンツ文明についてはギリシアとの関係だけでなく、インダス文明や中国文明といった一層広く世界的視野、つまり東と西との関係から捉え直されねばならないと指摘した。東西の文化交流の間で形成されたものがギリシア文明であり、そのギリシア文明を受け継いだのは西ローマ世界だけでなくビザンツ世界、シリア・アラビア世界があること、さらに地中海文明も本来は「東洋史と西洋史のあいだ」(飯塚浩二)にあり、西ヨーロッパだけの専有物ではないとし、古代・中世文明の中軸をなしたものはむしろ東であるとする西欧中心主義の批判がなされている(二七―二九頁)。

その後、筆者は、西欧近代が産み落とした科学文明そのものもつ危機をいかに克服するかという二十世紀の課題のほかに、アジア・アフリカ諸国の台頭にはじまる政治的に多元化するなどといった二十世紀の現実を踏まえ、これからは十九世紀以来の西欧中心主義から脱却し、真の世界史の構築が必要であると主張している。そして、その真の世界史建設に向けての先駆的業績がシュペングラーとトインビーにみられるとするが、両研究者の論は、比較文明論として着実に基礎づけ得る科学的な認識にはなっていないと指摘している。そこで筆者は、文化の多元的な発展様式を容認し、その基本的な文化圏の固有の存在様式を確定し、その相互

的な影響を追及し、文明の前世界史的構造の再建、世界史叙述のバランスの回復に一助することを目的にして、まずは基本文明圏のグローバルな時空的枠組み設定(図式)を提示している(三三―三八頁)。また、基本文明をめぐって、一七の文明圏―メソポタミア文明・エジプト文明・エーゲ文明・インド文明・中国文明・ギリシア・ローマ文明・シリア文明・ペルシア文明・アフリカ文明・メソアメリカ文明・アンデス文明・ビザンツ文明・アラビア文明・西欧文明・日本文明・ロシア文明・アメリカ文明―を取り上げ、その周辺文明や文明の形成・相互の交渉・文化的均衡の変化などについて説明している。

第3章「新しい人類史の時代区分」は、人類史の転回点となったと思われる大きな文明史的革命として、人類革命・農業革命・都市革命・精神革命・科学革命の五つの革命についての内容が中心となっている。さらに筆者は、こうした文明史的革命は従来の西欧中心に定位した世界史像から解放されて、より広く地球上のあらゆる文明を比較史的な観点からグローバルに見直す、一つの新しい歴史的視点を拓こうとする試みでもあると述べている(五二頁)。第一の人類革命について筆者はまず人類史は人類の成立とともに始まるのであって、たんに文書の記録が残っているとこころから始まるものではないことを指摘している(五五頁)。次に

類人猿と人間を区別するものとして「言葉の有無」、「脳の容積」、「直立歩行」、「道具の発明」を挙げ、中でも「道具の発明」がはじめて人類の進歩というべきものが爆発的な勢いで開始され、これを「人類革命」の主たる徴表とすることへの異論はないが、人間の成立についてそのような「自然」的特徴だけでは不十分で、人間のつくりだしたものの、すなわち「文化」によって定義されねばならないと主張している(五七頁)。第二の変革期である農業革命について、筆者は、人類において安定した食糧なしではありえない文化活動が農耕の発見によって可能になったことから、耕すことが「文化」のはじまりであることを述べている(六〇頁)。そして、農業の始まりが大河のほとりではなく、その周辺の山麓地帯に発生したとする最近の研究成果に触れ、山麓地で雨水を利用して始まった農耕が次第に大河の下流域に伝わり、河川水を利用して大規模な灌漑農耕に発展したことを述べた。第三の転換期である「都市革命」について、筆者は旧大陸(アフロ・ユーラシア大陸)における四つの地域に起こったもの——ティグリス・エウフラテス川流域のシュメール文明、ナイル川流域のエジプト文明、インダス川流域のインダス文明、黄河とその支流流域の殷文明——と新大陸(アメリカ大陸)における二つの地域に起こったもの——メソアメリカのエオティワカン文明、アンデスのティ

アワナコ風の都市文明——を中心に述べている。一方で、都市革命が形成される条件として、農業革命が進展し、灌漑技術が発達し、余剰農産物が蓄えられ、農耕に直接従事しない都市人口を養うことができること、を挙げ、初期都市文明では、治水・灌漑のための巨大な共同作業を前提とし、それに伴う直接に農耕にたずさわらない階級の出現と都市内の居住によってこれまでの農耕文明とは明確に区別されると述べられている。さらに、こうした都市文明の特徴として強力な王権と国家機構の成立、階級職業の分化、金属器の使用、商業の勃興、文字の発明、数学・占星術・暦学・医学の開発と記録、宗教の体系が生じること、などを挙げている。第四の展開点である「精神革命」について、筆者はヤスパースが「枢軸の時代」と呼んだ時代——ギリシア、インド、中国、イスラエルにおいてほぼ並行して、体系的な思想がはじめて生まれた精神的変革期——に起こったものであるとし、ギリシア思想・インド思想・中国思想の性格と特徴について述べた。そして精神革命が各地でほぼ同時期に起こったことについて、筆者は「各地域における農耕文化圏に遊牧民の文化が侵入して重なり合うという共通のパターン」があるといった検証可能な仮説も提示している。第五の大きな転換期である「科学革命」について、筆者はこれまでの革命は世界のいくつかの地域にほぼ並行して起こ

ったのに対し、近代科学の創出という事態である科学革命に関しては、十七世紀の西欧という特殊な地域においてのみ起こったことではあるが、その生成の過程が特殊西欧的であっても歴史的意义ではただちに全世界的な意味——科学革命は、科学と技術を結びつけ、産業革命を遂行し、近代工業文明をつくりあげ、結果的には西欧の世界支配を可能に導いた——をもつていたとし、その「科学革命」が精神革命以後に起こった人類史最大の転換期であるとして述べている。章の最後に筆者は、これまでの五つの革命に再度触れ、「科学革命」以後の新しい知的革命として登場した物質とエネルギーの極大を求める「情報革命」が第六の変革期の本質であることを批判し、現代における第六の文明転換期は、もつと人間の生き方の根本的な変革——「心と物の調和」「精神と物質の統合」——を要求していることから、「人間革命」を第六の文明変革期の徴表と位置付けた。なお、この点について第一章の末尾と巻末には「人間革命」は「精神革命」と「科学革命」を統合するものであり、これは後に「環境革命」と名付け直され、「環境革命」は「人間革命」を内包すると述べられている。

第4章「比較科学史の基礎視角」において筆者は、まず科学史における「西欧中心主義」という問題を乗り越え、改めて世界の科学史の再建（座標設定）に向かうべき理由を述べている。具

体的には「科学革命」の以前においてもさまざまな文化圏が科学や技術の伝統を有してきた、非西欧科学の知的遺産が西欧科学に多く流入しているといった二つの事実を挙げている（八二八頁）。非西欧科学の意義や価値の主張、非西欧科学の西欧科学への貢献を論ずるだけでは従来の偏狭な近代主義にほかならず、世界の科学史の目指すところではない、むしろ西欧近代科学が一つのタイプの科学であり、それも絶対的な意味において不動のものでとらえるのではなく、それも一定の社会的・文化的条件において形成された、ある特定の知の形態であるという認識に注目すべきであると指摘している（八五八頁）。そして、比較科学史は、一面において、これまでのさまざまな文明圏における人類の科学的営為を、グローバルに捉えかえず「世界の科学史」の再建という過去志向的な意図をもつが、同時にそれはわれわれの現に当面している科学技術文明の危機の現代的意義に支えられており、過去の再認識も、今日の歴史的意識と無縁ではありえないとし、文明の一つの転換期である今、改めて全面的に比較検討されること不可欠であると述べている（八七頁）。次に、筆者は、こうした比較科学史の立場に立って「世界の科学史」を改めて探求するための枠組や方法が存在しないことを指摘し、まずは比較科学史の枠組についてこれまでに筆者が取り上げた五つの人類文化の

進展を、革命の技術史的・科学史的意味に限定して説いている。さらに、そのような人類文化発展の五段階がどのようにして「世界科学史」の比較を可能にする枠組設定に適用されるかについてさらに三段階(概論範疇)——始原科学は「都市革命」、古典科学は「哲学革命」、近代科学は「科学革命」によって生じたもの——に分け、さらにこの三段階を一七の基本文明圏を設定する地球的文明史の時空的枠組のなかに当てはめての説明を加えている。次に、比較科学史の方法については、筆者はまずそれぞれの文明圏や社会において知を追及するエートス(価値志向)の違いがやがて科学を研究する態度の違い、結果に生じる科学の性格の相違をもたらしていることを指摘している(九五頁)。そして、そのような視点から筆者は三つの「古典科学」(中国科学・インド科学・ギリシア科学)を比較し、「近代科学」との差異——価値志向(知のエートス)はいかなるものなのか、担い手はどのような階層の人なのか、支持者は誰だったのか、(これらの三つの点において)「近代科学」は「古典科学」とは異なるどのような改革を行ったのか——について考察を加えている。そして最後の結びとして、筆者は、科学は人間的な営為として、常にその営為を価値づけるエートスがあったことを喚起すると同時に、これまで「目的合理性」のみを追求し拡大してきた今日の現代科学に「価値合理

性」の問い直しが必要であると指摘した(一一六頁)。

第5章「比較数学史への途」は、あらゆる人間に共通し、普遍的なものとして考えられている数学のもつ「文化拘束性」の検討を目的としている。ある社会において数学が持っている意味、価値、役割、機能といったものは、文化圏によって非常に異なっていたこと、それぞれが自己の文化に見合う数学の形態をつくりあげていたと考え、世界の諸文化圏における数学の種として——種類——バビロニア、エジプト、ギリシア、ローマ、アラビア、西欧、インド、中国、日本、マヤ、現代——を取り上げている。そしてその異文化圏の数学に見出される現象的な違いを指摘してきた従来の比較数学史に、さらにそれらの根底をなす数学の基本的な深層構造を探るためにシュペングラーの論を取り上げ、彼の主張の可能性を認めたくえで、複数の数学の比較を可能にするような「世界の数学史」の全体構造を鳥瞰し、さらにそれを大きく四つの基本類型——操作的・実用的数学、論証的・形相的数学、記号的・機能的数学、公理的・構造的数学——に分ける試みを行っている。まず、鳥瞰図において、独自の誕生と成熟と終焉をもつ——ほどの数学の種は、シュペングラーがいうように独立しているのではなく、互いに影響を受けていることを指摘し、その影響を同時に自らの文化的地盤において消化し、それぞれ独特な個性

をもった数学を形成していると述べた(二二四頁)。次に四つの基本類型について、I型に「演算」が特徴である操作的・実用的数学(バビロニア、エジプト、インド、中国、日本、マヤ、ローマの数学)では、論理的に物事を追及するというよりはむしろ直感的に非常にうまく計算を処理することを得意とするが、日常的な営為に役立つことはあっても科学そのものが数学的に構成されることはないことを指摘している(二二六―二二七頁)。II型の有限な形相を重視するギリシア数学をモデルとする論証的・形相的数学については、論証を基本に据えているところがI型とは異なるところであると述べている(二二七頁)。さらに、この数学の分類にはI型のオリエントとインドの操作的数学とII型のギリシアの形相的数学の影響を受けた混合型として操作的・形相的数学を挙げている。III型のヨーロッパ数学が代表とされる記号的・機能的数学の特徴は、これまでの類型とは異なり、「記号」の使用とその機能的側面にあると述べている。さらに、機能的側面(動的、関数的)が西欧数学を支えたとし、大きな特徴として変化そのものが研究の対象となる動的な見方、関数の概念を中心とする変量の数学を挙げている。IV型の公理的・構造的数学については、そのモデルとなった現代数学の複雑な構造の基礎には集合の概念があると述べている。さらに、集合の概念を基礎として公理による構造

化ということに人々の関心が向かっていることが重要であり、数学の創造が公理を置くことに始まるのではなく、公理にもられる数学的な内容そのものが大切であるが、それをすべて公理的構造化していくことが現代数学の一般的傾向である点が以前の段階の数学とは違ってきていることを指摘している(二三三頁)。論文の最後には、筆者による「数学」という概念を表す言葉の意味の違いを説明したうえで、比較数学史を行うにあたって、数学の社会史の追及するための四つの論点——知のエートスの問題、知の担い手はどういう人であったかという問題、知を支持し促進しその結果を享受するのは誰かという問題、研究の手段は何だったか——を挙げ、さらには、世界の数学的知の在り方を比較数学史的に再建することを主張がなされている(二三四頁)。

第6章 「自然の概念——東洋と西洋」は、自然と生命との関係、自然と人間を含む自然概念の変貌が、今日の新たな生命観や人間観とどのようにかわるか、を自然という概念の歴史(西洋と東洋)を顧みることに焦点を当てている(二三五頁)。まず、東洋の伝統における「自然」の概念について、筆者は中国と日本を挙げて説明している。中国の「自然」という言葉の由来や意味を老子の思想などを挙げながら説明した後、中国の古代において「自然」とは「おのずからなる状態」であり、「他者の力によるので

はなく、それ自身のうちにある働きによって、そうなること」を意味したと述べ、当時の中国語でそれを意味する言葉はむしろ「天地」や「万物」であり、今日の中国語での「自然」は *nature* の訳としての日本語の「自然」が、中国に逆輸入された後のことであると述べている(二三七―二三八頁)。他方、日本における「自然」についてはその概念の展開に注目している。空海や紫式部および『枕草子』における「自然」の展開を取り上げているが、自然を「自ら然る」と動詞的に読んだのは「自然法爾」における親鸞の言葉が最初ではないかといった可能性を提示している。その後「自然」という言葉が *nature* と等置されるような形で日本語の中に入ったのは蘭学によると述べている(二三八―二三九頁)。次に西洋(ヨーロッパ)の「自然」については、まず古代ギリシアにおける「自然」はピュシスとよばれ、人間や神をそのうちに包み込んだ生ける統一体でありすべてが「ピュシス」に包まれるという意味(パンピュシズム)で使われていたことを述べた(二四〇頁)。その後、中世キリスト教世界に入ってから自然を意味する言葉は古代ギリシアのパンピュシズムとは大きく異なる階層的秩序の意味をなす *natura* ——人間も自然も神の創造物であり、神のみ超越した存在——に捉えられ、次第に近代の機械論的自然観の形成へ向かったと述べている(二四〇―二四二頁)。そして

その機械論的自然観の形成に徹底的に遂行した人物としてデカルトを取り上げ彼の「機械論的」世界像とフランシス・ベイコンの「自然支配」の理念によって近代の科学技術が発展していくが、この近代の「機械論的」「自然支配的」自然観が後に環境問題や資源問題をもたらしていることを指摘している(二四二―二四三頁)。最後に、筆者はこれまでの「自然」概念の展開を踏まえたうえで、十八世紀に日本において *nature* を「自然」と訳したことにについての検証を行っている。その後、筆者は近代の自然観——従来の他律的また要素主義的で、決定論的な機械論的自然観——に代わる新たな自然観は、自己組織系の発展として捉えられ、死せる自然から生ける自然への転換であると述べている(二四四―二四五頁)。そして、東洋の思想に親近感をもち、積極的に学ぼうとするニューサイエンスの唱導者たちに注目し、広い意味で「西洋と東洋が融合する時代」の到来を示唆した(二四六頁)。

第7章「地中海文明の構造」では、まず従来の地中海世界というものがヨーロッパ中心主義の考え方を前提にしていると筆者の考えが述べられ、地中海世界をより広い視野のもとでみると本来の姿——地中海世界とは、インド・ヨーロッパ系の文化とハム・セム系の文化が互いに影響しあいながら発展してきた二次元的な複合的世界、複数の文明の坩堝、アマルガムである——

が見える」と述べている(二四九頁)。

そして、その三つの地域——ヨーロッパ、アフリカ、アジア——に共通点、つまり地勢・気候・生活様式の共通性が、地中海世界の統一性をもたらしているとし、これに、インド・ヨーロッパ系の文化とハム・セム系の二つの系統の文化の総合交渉から形成された複合文明が地中海文明であると述べた。次に、筆者は古代から現代にまでいたる地中海世界を、従来の西欧中心主義から脱却して現実に即した巨視的・全面的に捉える一つの時代区分を提示している。地中海世界は、第Ⅰ期・エジプトⅡエーゲ期(第2中間期・フェニキア期)、第Ⅱ期・ギリシアⅡフェニキア期(第2中間期・カルタゴⅡローマ期)、第Ⅲ期・ローマ期(第3中間期・ビザンツ期)、第Ⅳ期・アラビアⅡビザンツ期(第4中間期・十字軍期)、第Ⅴ期・トルコⅡヨーロッパ期(第5中間期・ヨーロッパ期)、第Ⅵ期・欧米Ⅱアラブ期の六つの時代に区分でき、それぞれの間にやや短い中間期があることを示しながら説明を加えている。さらに、本論文の末尾において筆者は、これまでの国家単位のナシヨナリズムやヨーロッパ中心の普遍主義を超えた具体的・現実的な概念装備を与えてくれたトインビーやシユペングレー、ダニレフスキーらによってなされてきた文明圏の概念が持つ有効性を評価しつつも、その文明圏における問題点を

指摘している。つまり、基本文明を設けることへの解決が、後にバグビーによる「基本文明」と「周辺文明」の枠組で文明を捉えようとする考えでも静的な捉え方であることを指摘しているのである。したがって、筆者は諸文明の発展をもっと動的に捉えるための新たな概念枠として「文明交流圏」が必要であることを提案し、地中海文明の研究によって発見されたことを述べている。さらに、そのような「文明交流圏」(一定の時代の一定地域における恒常的な歴史的交流の場)が他にも存在していることの例を挙げている(一六二―一六四頁)。

第8章「十二世紀ルネサンス——西欧文明へのアラビアの影響」では、筆者はまずバラクロー(英)、ホイジンハ(蘭)、チャールズ・ホーム・ハスキンス(米)によって定着した「十二世紀ルネサンス」の概念に触れ、彼らと筆者の概念の捉え方の違いについて述べている。筆者は、西欧がアラビアやビザンツの文化と出会ってそれを吸収し、学術、思想、文化の大転換期を遂げる時代であったことが十二世紀ルネサンスの本質として定義した。また、西欧においてイスラム文明との出会いが、十二世紀ルネサンスに活発な知的運動と文化の興隆を促したとし、「イスラムと西欧」の問題に注目している(一六六―一六七頁)。一般に「ルネサンス」は中世から近世にかけて「カロリング・ルネサンス」(教化

的・教育的)、十二世紀ルネサンス(哲学、科学、法学、文学の分野)、イタリア・ルネサンス(絵画、建築の分野)の三つに分けて考えることができるとし、それぞれのルネサンスの特徴を述べている。次に、十二世紀ルネサンスの成立が、アラビアの西欧との交渉、西欧文明圏によるアラビア文明の消化吸収が前提とし、イスラム・ルートであるスペインとシチリアの二つの地域を拠点にしていることを述べ、その具体的な展開を哲学、科学、文学の三つの領域に分けて述べている。まず、哲学的側面について十二世紀以前の神学は弁証論的なものであったのが、次第に形而上学や自然学が結びついていく過程を四段階——「自然の諸問題」による哲学ルネサンスに発端し、シャルトル学派による自然科学的研究が勃興、シャルトルの科学的伝統がオクスフォードに移ったこと、アルベルトゥス・マグヌスとトマス・アキナスにイスラムを介してアリストテレスが入ったこと——に分けて説明を加えている。科学のルネサンスについては、ギリシア・アラビア科学の受容によってヨーロッパの科学的知識の財産が膨大になり、そこから様々な学問(代数学、化学、力学、天文学など)が生まれる地盤が形成されたことを述べ、さらにその点が科学より哲学のほうに連続性が見られることを示した。次に文学の場合、十二世紀に起きた文学における急激な変化について焦点を当てて

いる。アラビアの愛の物語(当時のイスラム世界は、女性の地位が高く、女性に捧げられた愛も深かった)の影響によって新しいヨーロッパ文学の世界が誕生し、そこからロマンティシズムの成立をみることができるとした。最後に結論として筆者は、アラビアの西欧に対する影響にはまだ不分明な点が多々あることを指摘し、相互の歴史的偏見を超え、単線的な理解からもっと文明間交流の深層にまでくだって考察することによってこれまでの哲学、科学、文学などの全容が認められることになる」と述べている(一八六一—一八七頁)。

以上の八本の論文で著者の主な研究視点と問題意識がある程度把握できたと考える。以下では第9章のエッセイ「地中海世界の風景」と第IV部の対談について簡単にまとめることにしたい。まず、第9章の「地中海世界の風景」では、筆者はまず、通常の地中海世界がヨーロッパの祖先としてギリシア、ローマがそのまま存在してきたと観念されていることを述べた後、筆者の見解——地中海世界はギリシア以前にも、またローマ以後にも存在し、それは悠久の古代から現代まで続いていること、北のインド・ヨーロッパ系文化と南のセム・ハム系文化が相互に拮抗しかつ関連しながら発展する二元的な複合世界をつくっている——を述べてい

る。そして西欧とアラブに焦点をあてて、筆者自らの体験（五八日間に亘る旅行）に基づいて地中海の風景を紹介している。次に、第10章の「比較文明学の建設」は、日本の生態学者・民族学者・情報学者・未来学者であった梅棹忠夫（一九二〇—二〇一〇）と筆者の対談である。対談の中で両者における比較文明学の視点は、それぞれの文明が個性を保ちながら他の文明との交流の中で発展する、つまり経験科学（経験論）でないといけないとし、従来の起源論に対して批判的な立場を示しながら、今後の比較文明論について両者の考えが述べられている。第11章の「比較思想の地平」では、インド哲学者・仏教学者であった中村元（一九一—一九九九）との対談である。現代は、色々な思想が交流し合い、対話しながら可能な融合を求める時代であって、ある文化圏の思想だけが唯一絶対で、それが世界を支配できる時代ではないことを対談の切り口として、両者における研究フィールド——中村の中国とインドと日本の比較、筆者のインド、中国、ギリシアの比較——について互いの比較思想への関心と問題意識が述べられている。さらに、対談の後半の専門知識とすぐれた技術をもっていることは評価するが、哲学の概念が混乱している日本、とくに知識人が抱えている問題、そして新しい原理の探求についての両者が主張するところは、まさに現代に生きる我々が真剣に取り組ん

でいかねばならない重要な課題が示されていると考える。本書最後の第12章「地球時代の文明史像」は、比較文明学者の吉沢五郎（一九三七—）との対談が収録されている。対談では、人類にとつての二十一世紀の意義と二十一世紀のビジョンやメッセージを求めた国際会議やシンポジウムに参加された筆者の感想が、どの国も一元的（局限されている）視野であったことを述べている。そして、地球的な視野、第三世界も含めた全人類の地球的視野の担い手は、大国のパワー中心の権力主義もナショナリズムの限界も越えて地球的なことを考える日本人のほかにないことへの両者の主張がなされている。一方で、学問の傾向がまだヨーロッパの近代的な学問に対する追従のイメージが払拭できずにいる日本が抱える問題にも触れつつ、日本の比較文明学の誕生が持つ意義が大きいことを示している。そして、従来の比較文明論に立脚してきた世界史に、新たなシステム——全地球上の諸文明の縦の発展と全人類の統一的な横割りのできる段階的な発展という二つの側面を十分に満足せしめる——の構想について述べている。最後に、二十一世紀のあるべき姿は、地球時代の人間革命の遂行、つまり西洋と東洋との結合が必要不可欠であることを述べている。

以上のエッセイと対談は、いずれも興味深い内容で、二十一世紀に生きる我々に「文明」に対して多くの示唆と思考する契

機を与えてくれたと考える。最後に本書の結びで筆者は、地球的な関連を持った人類の問題の解決方法を組織的に探究する学問——普遍主義ではない、豊かな多様性を認め合う——として「世界学」を提唱している。そして世界的探求がさまざまな領域、つまり政治学・法学・経済学・文化においてなされていることを示している。さらに、筆者自身の長年築いてきた地球的文明史の構想（歴史の領域における世界学的観点）もその世界学を意識してきたことであると述べていることから、筆者の世界学への関心と、日本がその先端に立つことを切望していることがうかがえる。

三 おわりに

評者を含む多くの研究者が参加して行っている「麗澤大学比較文明文化研究センター主催『読む会』研究会¹⁾」では、様々な専門分野で活躍中の研究者が集まる中、著作内容をめぐって活発な議論が行われた。無論、毎回の研究会には本書の著者である伊東俊太郎先生が必ず出席され、広い視野をもって文明研究に接する方法について、多くの示唆・教訓を与えて戴いた。これは同じ専門家たちが集まるところでは体得できない貴重な体験であると考え

る。また、一度世に出された著書を読み直した後、研究者を囲んで議論を重ね、欠落したところの補足あるいは新たな知見を得た時は加筆するなど、社会の激しい変化を的確に捉え、その都度対応される先生の姿は、研究者として学ぶべき・進むべき道であると考ええる。

また、本書における比較文明についてさらに詳しい内容は『伊東俊太郎著作集 第九巻 比較文明史』（麗澤大学出版会、二〇〇九年）に収録されている。本書と合わせて読むことを薦めたい。

註

(1) 『読む会』は、伊東俊太郎客員教授を囲んで『伊東俊太郎著作集』を読む会の略である。『読む会』は、月一回、担当者が一二冊からなる著作集のうち、担当箇所を決め、興味深かったところを中心にまとめ、それを参加者と共有する形で進めている。また、研究会には、毎回伊東先生をお招きし、著者と本人を交えての議論ができることが特徴である。